

中田かわら版 6 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

気づけば農業研修生？

実は「いずみ中田の蕎麦打ち会」

皆さんは「とことん蕎麦打ち」をご存知でしょうか。これは踊場ケアプラザが毎年募集している蕎麦打ち会です。ですがよそで開催される会とまるで違います。先ずは室内講習 2 時間受けます。8 月から畑仕事が始まります。蕎麦の種を蒔きます。育てたら刈り取ります。稲の様に干したり脱穀機にかけたりして最終的には製粉します。ここでやっと蕎麦打ちが可能になります。天候により蕎麦粉の収穫量に差はありますが、ここ数年一人 3 回の蕎麦打ちが出来ます。蕎麦粉 300 g 繋ぎ 60 g が 1 回の分量です。

この講習から蕎麦打ちまでの指導担当するのが「いずみ中田の蕎麦打ち会」です。常時 20～22 名が在籍して活動中です。



蕎麦打ち会の拠点のビニールハウス（右）

実はこの両会の目的は「蕎麦打ち」を通して住民の野外活動誘致と交流なのです。蕎麦打ちだけをイメージして入会された会員は「蕎麦打ち会と言うけど農業の会ですね」と言います。しかしながら辞める人は一人も居ません。

その秘密は休憩時間にあります。会員の皆さんは中田生まれではなく遠くに故郷をもっている人の方が多いのです。お茶の他にもそれぞれ差し入れを交代して持ち寄ります。みんな自慢の手作り料理や菓子類です。漬物、クッキー、お焼き、果物。そして一番の美味しいものは「会話」でした。昔の苦勞話、少し自慢げ話、今の悩み等々を話したり優しく笑って慰めたり・・・。

会創設 8 年目になります。50 代、60 代の会員も増えてきました。畑仕事の好きな人は蕎麦穂刈り取り後の畑を利用して思い思いの野菜作りにトライして楽しんでいきます。1 月から 6 月前半までです。ジャガイモ、タマネギ、レタス、ニンニク等々。『立派なジャガイモですねー、美味しそうなタマネギー！』とか言ってお裾分けして頂くのは僕の役目です。元々よそで畑を楽しんでいる人も加入してきます。何故かはもうお判りでしょう。そう、大切なのはお茶の時間です。蕎麦打ちはもはや口実化しつつあります。1 度入ったらやめられませんヨー。

松本 正



表面にて今期の「とことん蕎麦打ち」の募集を掲載しております。ぜひご参加ください。

■郷土史家・小島貞雄氏の功績<7>

青年時代の思想と創作意欲 宮田 貞夫

過去 6 回にわたって小島さんの功績を紹介してきた。「郷土かるた」「長後街道絵巻」や江戸力士・戸田川を詠んだ「相撲甚句」、数々の郷土歴史書の編集に係わってきたその功績など。しかし、昭和 20 年 8 月、終戦をむかえた二十歳のころの小島さんのことは知られていない。ところが翌年には早くも中田町青年団たちがガリ版刷りの文集を発行し、小島さんがその時の文章を残している。戦争には負けたが青年たちは日本の未来に向かって歩みだしている。

■ 機関紙『若草』について

小島 貞雄

昭和 20 年 8 月 15 日。永い永い戦争は終わった。戦線から復員し、軍需工場から離れ、勤労動員から解放され若人は夫々の故郷に帰ってきた。「国破れて山河在り。城春にして草木青し」。私たちが『若草』を創刊したのは丁度こういった時だった。悠久の光輝く星空の下、若人は戦争ですっかり廃れた中田の銀座——東の田圃道（夕涼みのために集まる男女でござった返したので、いつとはなくこう呼ばれていた）に集まって日本の将来や、自分たちの夢を語り合った。そして常に集まる数人の同志によって雑誌を作ろうということに決まったのであった。

紙は出し合い印刷機は借りる、としても果たして皆が原稿を書いてくれるだろうか、ということが最大の難関だった。そして発足後、間もなかった青年団の幹部（特に第 6 班班長小島吉春）にお願いしたところ全面的な協力を約束され、我等同志は百万の味方を得た心持ちで編集や構想を練ったのだった。

<祝 歌>

戦火の後に寒さ来れども やがて若草萌え出ずらん

（女子青年団長・森 サキ）

かくして創刊第 1 号は終戦記念日の 21 年 8 月 15 日に発行された。巻頭言・祝辞・論文・随想・創作・詩壇・俳壇・歌壇・後記を通じて執筆者 27 名、18 頁のガリ版刷りであった。表紙は若葉萌ゆる山々の遠望で奥津静雄（静峰）筆、会印は小島常雄（秋水）、編集印刷は小山源雄（耕人）居を借りた。奥津昭二（波臣）、小山廉夫（竹園）、小橋市郎（笹舟）にも種々御尽力願った。

『若草』は各方面に多大に影響を呼んだ。第 2 号からは中田青年団第 6 班の機関誌として班の行事、公德事業・討論会・試作地手入れ・俳句会・旅行会等の予告や成果を合わせて発表した。清田正男（桐葉）が編集に参加して談論風発した。

隔月発行で年 6 回、2 号より 3 号、3 号より 4 号と益々充実していった。そして 23 年 3 月には青年団長（島村政男）の依頼により団の機関誌第 1 号を編集することになった。これは先に座談会（当時はまだ会館がなく中田寺本堂がつかわれていた）の折、団としても 6 班の『若草』のような機関誌を持つべきだと言いう結論から誌名も「なかだ」と決定し、発行予定日も決まっていた。私たちは文化部長だった小山源雄（耕人）を扶けてその大任を果たした。

国土は日に日に復興し、世はだんだんと安定していった。一人嫁ぎ、二人妻帯し青年団から次々に籍を消していった。私も 24 年秋に結婚して青年団から身をひいた。芳しく匂った『若草』もいつしか霜枯れて寒風に晒されてしまった。だが然し忘れてはならない。大地にしっかり根を張って、来るべき春の息吹に再び萌えあがらんとしている生命を！

<注>原稿は縦書きのため、漢数字は洋数字に、氏名の前に記された雅号はカッコ内に収め、人名の後に着けました。使用漢字は原文どおり。（宮田）

編集後記

編集委員になって約 3 年、さまざまな地域活動取材させていただき、とても素敵な取り組みをしている人たちと出会い、情報交換させていただきました。その中で「分野を超えた情報の流れ」をもっと活発にしようと「中田編集局」という情報発信の“拠点”づくりも始まりました。この 4 月からは立場地区センター、中田コミュニティハウス、葛野コミュニティハウスの運営にも携わっています。こちらは人と人がリアルに出会う「情報拠点」です。気軽においでいただき、施設をフルに活用してください。（鈴木）

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本 正

編集委員：小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋 宏之